ISSN－0913－1906
関西大学博物館彙報
2018年９月30日　発行

千陵

No. 77

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]

蓄音機 HMV193

◉ 目　次 ◉

蓑虫山人の片口形土器―本山コレクションと数寄者・好者―・・・・・山口　卓也　2
本山彦一蒐集考古資料からみる本山彦一と大正期の文人墨客との交流
・・・・・

蓑虫山人の片口形土器
―本山コレクションと数寄者・好者―

山　口　卓　也

１．本山コレクションの片口形土器

関西大学博物館所蔵考古学資料の本山コレクションには、神田孝平が蒐集した東北地方の縄文資料が含まれている。写真１は、そのうちの大洞Ｃ２式片口形土器である。高さ８ cm、口径16.5cm ほどで、注ぎ口がついている。内面に黒色の漆が塗布されていて（藤井1973）、出土後、茶会での花器や水指に供するため防水加工として施されたと考えられる。

写真１　片口形土器

この土器を詳細に観察したところ、片口と底部に、不自然な部分があり、形状が大きく「改変」されている可能性が考えられる。鉢の口縁部が片口の取り付け部分に段差を付けて分厚くなっている（写真２）ことや、内底漆面に木目らしきものが観察され（写真３）、破損した浅鉢形土器の口縁部破損部に、別の注ぎ口破片をはめ込み、漆の厚塗りで接着防水、さらに抜けた底部を木片で補って漆で塗込防水した、キメラのような土器であると観察できる。

２．蓑虫山人の茶道具一切

この片口形土器は、青森を放浪した画家蓑虫山人が亀ヶ岡で発掘し、山人が描いた『陸奥全国神代石併古陶之図』や『土器図石器図絵』にもこの片口形土器の姿がある（青森県立郷土館2008）。出土時の形状のままで神田孝平に贈られたものと考えられてきたことから、本山や神田が関わった改変は考えにくい。漆の塗布は改変と同時と考えると、改変は蓑虫山人の手による可能性が高い。

神田孝平は、明治19（1886）年夏、青森県浪岡で蓑虫と号する奇人と逢い、「この人至って古物ずき」と評し、「瓶(亀)ヶ岡掘り出しの壺から作った煙草入れ、同種の土偶の首を根付にしたもの、翡翠の大珠、蕨手鉄刀」を見せてもらっている。また、別の人から、「この老人は、茶道具一切を瓶(亀)ヶ岡土器にて取り揃えて愛玩している」と聞かされており（神田1887)、山人が、茶道を嗜んだこと、茶道具を亀ヶ岡の出土品で一式揃えていたことがわかる。

関西大学博物館の片口形土器は、蓑虫山人の「茶道具一切」の中の１点であり、山人は、破損品の浅鉢形土器に、別の片口形土器の注ぎ口と木片で補遺合成し、茶器としての花器、水指を作り上げたのではなかろうか。

挿図１は、蓑虫山人の『山人写画』（明治13～17年）の121で、山人が点茶で客人をもてなしている風景である。茶器の横に茶筅が描かれている。壁面には、山人の『土器図石器図』絵三幅と『土偶図』一幅が掛けられ、点茶席横には『陸奥全国神代石併古陶之図』らしき風炉先屏風がある。棚上には台付鉢形土器と土偶頭部が配され、床の菓子器も鉢形土器のように見える。この風景は、茶会の展観席の床と壁面を詳細に描いたものであり、山人が蒐集品を披露する数寄茶会の風景として捉えることができる。

山人は、青森の数寄者・好者を募って、考古遺物や骨董、書画などを展示紹介する「書画会」を頻繁に開催しており、この『山人写画』には、その風景が多く描かれている。その中には、煎

写真２　片口部分

写真３　浅鉢内面底

挿図１　『蓑虫山人写画』121：青森県立郷土館2008より

茶を供する場面が多く、挿図１のように抹茶を点じる事もあったようだが、会で供される茶は煎茶が主流であったらしい。

３．本山コレクションと数寄者・好者

近代の数寄者は、純粋な茶人ではなく、多くが財・政・官界に大きな力を持つ近代ブルジョワジーの一群であり、彼らはあくまで趣味として茶を楽しみ、その巨大な財力にまかせて茶道具や古美術品を蒐集し、独特の茶風を切り開いたとされる（熊倉1980）。

数寄者間で美術品の争奪戦が起こり、値段が高騰した。かれらは蒐集を浪費と考えず、むしろ投資とみなし、さらに外国への文化財流出を防ぐ積極的な意義ある行為であるとも考えた。茶の湯から入った数寄者よりも、むしろ茶道具や美術品の蒐集趣味から入った人も少なくなかったらしく、茶の湯自体よりも古物、珍奇なものなどに執着する人々を、あえて、区別して「好者（すきもの、または、すきじゃ）」と表す場合がある。この延長線で考えると、江戸時代の木村蒹葭堂や木内石亭の本草会や奇石会も、この書画会や展観席のある茶会に似たものであった可能性が思い浮かぶ。

関西大学博物館の本山コレクションの形成には、明治、大正、昭和初期の数寄者・好者と評される人物が関わっている（山口2010）。 明治４（1871）年の大学南校物産会に石器類を出品し、正倉院御物の調査に従事した柏木貨一郎は大茶人と評され、益田孝に数奇の影響を与え、自宅でエドワード・モースに古物を見せたが、文部省退官後は、政官財界の有力者に茶室を建てている（早川1998）。モースも茶の湯を稽古して、茶入などの茶器コレクションを保有していた。柏木と蓑虫山人が直接学術的交流をしていた神田孝平は、東京人類学会という学会、政界の重要人物という影に隠されて、茶人、数寄者としての側面ははっきりしない。

一方、明治35（1902）年、大阪を中心に書画骨董を展覧品評し、茶事を楽しむ「十八会」が結成されているが、ここでは、輪番で居宅を会場とし、抹茶と煎茶の両席を設け、展観席に書画骨董を展示しており、青森の書画会との類似がうかがえる。蓑虫山人の青森での活動は、北前船航路や、明治期以降の交通整備と人的交流といった解釈も必要となると思われる。

明治期後半から大正期を経て、大阪では、しだいに煎茶会は骨董の鑑賞と取引の比重を高めていき、点茶会と趣向を分けていったという。この時期に実業界に頭角を現してきた本山彦一は、茶会に姿を見せる昭和初期、大阪を代表する有力数寄者の「関脇」と位置づけられており（斎藤2012）、本山の考古資料の蒐集が数寄として評価されていたと考えられる。同時期には、本山を取り巻く有力者である藤田平太郎や久原房之助、丸山龍平、辰馬吉右衛門らも数寄番付に名を連ねている。

蓑虫山人の展観茶会や書画会は、公的な美術や文化財の研究機会の提供、博物館や美術館、文化財保護という近代的な制度や発想の及びきらない地域にあって、数寄と茶会が伝統的な日本の美術的、学問的価値の展示公開と保護の場として機能したと感じられる。

藤井祐介 1973「壺形土器・片口型土器・台付鉢形土器・香炉形土器」『関西大学考古学資料図鑑』

青森県立郷土館 2008『蓑虫山人と青森』

神田孝平 1887「奥羽巡回報告」『東京人類学会報告』第２巻第11号

早川正夫 1998『数寄屋ノート二十章』

熊倉功夫 1980『近代茶道史の研究』

熊倉功夫 2013「概説：近代の茶の湯」『講座　日本茶の湯全史』第３巻近代

矢ヶ崎善太郎 2013「近代数寄者の茶と数寄空間」『講座　日本茶の湯全史』第３巻近代

山口卓也 2010「本山コレクションの由来」『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』

関西大学博物館学芸員

本山彦一蒐集考古資料からみる本山彦一と大正期の文人墨客との交流

渡　邊　貴　亮

はじめに

関西大学博物館では、2018年度春季特別展示会として2018年４月１日～2018年５月20日の期間、「山本竟山（やまもときょうざん）の書と学問－湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク－」と題した展示会を、東西学術研究所の主導のもと開催した。本稿では、展示計画の際に新規に認識された本山彦一蒐集考古資料（以下本山コレクション）中の山本竟山寄贈資料について紹介するとともに、大正期の文人同士の交流について触れ、資料の来歴について若干の考察を行いたい。

本山彦一蒐集の石鉞

筆者は、上述の春季特別展示準備にかかるとともに、本山コレクションの再整理を行っていたところ、『本山考古室要録』[1]および『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』[2]に「山本竟山氏寄贈」の文字を見出した。実物を確認したところ、中国浪渚（りょうしょ）文化に属する石鉞（せきえつ）であった。

本資料は、紀元前3000年～2000年頃に、現在の中華人民共和国南東部の浙江省を中心とする地域に分布圏を持っていた浪渚文化に属する石鉞である。石鉞は有孔の斧形石器であり、石斧との違いは柄に装着する際に、穿孔に紐を通して柄に縦向きに装着される。また、石鉞は、本来は武具としての機能を有しており、腰に装備していたと推測されている。

本資料は以前に写真及び計測データが公開されている[3]が、この機会にも図化及び写真撮影を行ったため、ここに改めて計測データとともに掲載する（図１・写真１・２）。計測値は、長さ14.79cm、最大幅10.98cm、最大厚1.25cm、孔内径3.64cm、孔外形4.1cm、重量372.99g である。

表面上部から左側縁上部にかけて敲打成形の痕跡を留める。剝離痕の末端部は研磨により不鮮明となっており、敲打成形後に研磨することによって製作されている（写真２上段左）。また、裏面右側には大きな剝離痕がみられる。落下などにより衝撃を受けて割れたようにも見えるが、剝離痕を観察すると剝離面内に研磨の痕跡がみられる（写真２上段右）。発掘資料ではないため製作に伴う痕跡とは断定できないが、この痕跡を積極的に評価するならば、成形敲打の失敗か製作中の事故により大きく欠損してしまい、その上から研磨して整形を試みた跡であるとも考えられる。

写真１　石鉞（縮尺2分の1）

穿孔部は「竹のような管状の工具で」孔をあける管鑽（かんさん）の技法を用いて穿孔されている[4]（写真２下段）。この方法で穿孔を行うには、表裏両面から寸分の狂いもなく同心円状の穿孔を行い、中央で貫通させなければならず、極めて高度な技術を要する。穿孔の単位は片面につき７～９回の単位が認められる。両面とも同じ様相を呈しており、表裏両面から同様の手順で穿孔を施している様が看取できる。この特徴的な中央穿孔部の内径・外径は、浙江省反山遺跡出土の石鉞に多くの類似資料が含まれる[5]。これらの点からも本資料が典型的な浪渚文化に属すると考えることが妥当であろう。

本資料の特徴として、石器両面の一部に朱の痕跡が遺存している。当初は他の本山コレクションにも残されている朱書きの一部が残存しているものかと考えていたが、朱の色調が他の資料と若干異なること、朱の痕跡が両面に残っていること、表面と裏面では痕跡の長軸が揃わないことなどから、本山コレクションに施された朱書きの痕跡ではなく、副葬に伴う朱の付着と判断した。本資料の石材は精良な玉質を呈しており、このことからも実用品ではなく副葬品であったことが示唆される。

石器表面には「漢葯鏟」「山本竟山所贈」の墨書がある。「鏟」は「さん」と読み、農具の鋤や工具の鑿、鉋の刃などをあらわす。また、地金を透くための工具にも用いられる文字である。当時の文人らの、石鉞に対する認識を垣間見ることができる資料である。これらの文字については残念ながら山本竟山の手によるものではない[6]。

本山彦一と山本竟山

本山彦一（1853-1932）、号は松蔭と称す。熊本藩士の子として熊本に生まれる。慶応義塾で学び、神戸師範学校長、藤田組支配人などを歴任した後、大阪毎日新聞社の社長となる。実業家、貴族院議員であると共に様々な文化への造詣が深く、富民協会の設立や農業博物館の設置、自身が蒐集した考古資料の展示施設として本山考古室を開設するなど、多方面で多くの業績を残した。

山本由定（1863-1934）、号は竟山・聾鳳と称す。日本近代の書家であり、日下部鳴鶴に師事し、楊守敬や呉昌碩らとも交流する。明治時代末には居を京都へ移し、関西においても多くの文人墨客と交流した。その中には、内藤湖南、富岡鉄斎、長尾雨山、羅振玉らの名が見られる。師の日下部鳴鶴は楊守敬との親交も深く、山本

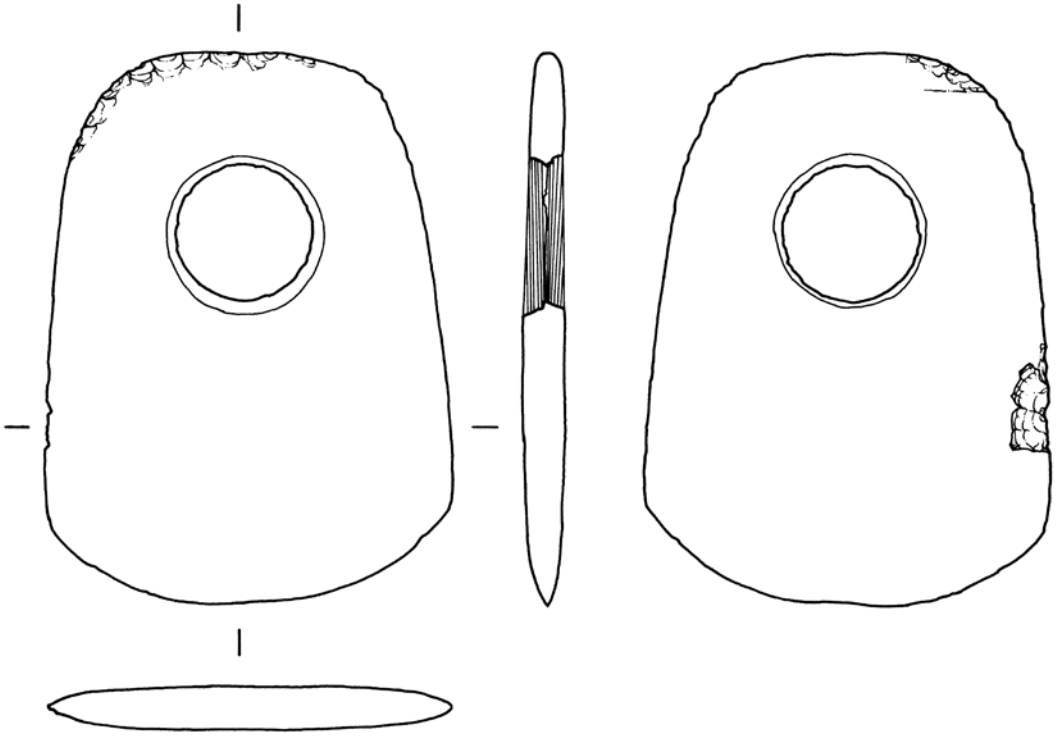

図１　石鉞実測図（縮尺2分の1）

写真２　各部拡大写真

竟山自身も中国へ遊学の際には楊守敬を訪問するなど深い親交を伺うことができる。

次に、本山彦一と山本竟山はどのような交流があったのかを見ていきたい。先述のように、山本竟山は墨客として京都に居を構え、多くの文人と交流を持っていたことが知られている。特に内藤湖南や富岡鉄斎・桃華、長尾雨山、狩野君山らとは頻繁に交流の記録がみられる[7]。1913年の大正癸丑蘭亭会、1916・1917・1918・1920年の寿蘇会、1922年の赤壁会などは、これらの交流から実現したものであろう。

このうち、1913年の大正癸丑蘭亭会では山本竟山と本山彦一が共に出品している[8]。また、第２回目にあたる1917年の大正丙辰寿蘇会には山本竟山と本山彦一が出席した記録がある[9]。さらに、1922年の赤壁会では発起人の名前の中に山本竟山と本山彦一の名前がみてとれる[10]。

このように、本山彦一と山本竟山とは直接的な交流の記録はほとんど残されていないものの、同じ雅会に出席し、さらには会の発起人を務めるなどしていることからも、交流があったことはほぼ確実であろう。このような交流の中で山本竟山は、本山彦一が古物を蒐集している事を知り、自身のコレクション中から石鉞を贈ったのではないだろうか。

山本竟山と石鉞

ここまで、山本竟山と本山彦一の交流をみてきた。次に、山本竟山の所蔵していた石鉞の来歴を考えてみたい。山本竟山が中国の器物を入手し得るルートはいくつか考えられる。主な可能性は①自身が中国に赴いた際に入手した、②人を介して入手した、の２つである。

では、①の直接入手はどうであろうか。山本竟山はその生涯で７度の中国訪問を果たしている[11]。その中で直接石鉞を入手する事は、物理的には可能であっただろう。ただし、これらの訪中では主に書跡や碑帖を買い求めていたようであり[12]、古物については入手した記録がほとんど残されていない。また、管見の限りでは、山本竟山は浙江省付近には訪れていないようである。

それでは、②の間接入手はどうであろうか。当時、日本国内で中国の文物、特に古物を所蔵している人物は極めて少なかったであろう。その中で、山本竟山との交流を見出せる人物では羅振玉が最も有力である。

羅振玉（1866-1940）、字は式如・叔蘊、号は雪堂・貞松と称す。清朝末期の官僚であり、考古学者、書家、教育者でもあった。現在の中国浙江省紹興市上虞の出身である。辛亥革命の折

には京都へ亡命し多くの文人と交流した[13]。それらの人物は、円山公園で撮影された羅振玉帰国送別会記念写真からも看取でき、内藤湖南、山本竟山、長尾雨山、富岡鉄斎、犬養木堂の他に濱田耕作らも写っている。羅振玉は山本竟山とも交流が多く、先述の蘭亭会や1913年和漢法書展覧会、1916年大正乙卯寿蘇会、1917年大正丙辰寿蘇会、1918年大正丁巳寿蘇会など多くの会で名前を並べている[14]。

この羅振玉であるが、来日の際には大量の図書、甲骨、彝器（いき）、明器、古印、古玉などを持ち込んでおり、さらに日本での生活費の工面のために、これらを売却したとの記録が多く残っている[15]。このような記録とともに、羅振玉の清朝での立場や浙江省の出身であったことなどを勘案すると、本山コレクションの石鉞は羅振玉から山本竟山を経て本山彦一の下へと渡ってきた可能性は考えられないだろうか。

おわりに

ここまで、本山コレクション中より見出した「山本竟山所贈」石鉞について紹介し、その来歴について若干の考察を行った。また、本資料を介して垣間見た、大正期の文人墨客の交流についても触れることができた。

本資料の来歴についてはいささか推論に推論を重ねた感は否めないが、当時の文人墨客の交流を視野に入れれば、あながち見当外れとも言えないのではないかと考えている。羅振玉と最も親交の深かった内藤湖南と本山彦一は、考古学者であり、大阪毎日新聞社京都支局長を勤めた岩井武俊を介しての交流もあったことであろう[16]。本山彦一と羅振玉には、自国における農業と教育の発展に注力した共通点も見出すことができる。

今後は、本山コレクションを通して、当時の財界人・文人らの交流を復元することも視野に入れて資料を活用していくことが必要である。

謝辞

最後になりましたが、本稿の執筆にあたり関西大学文学部教授中谷伸生先生、陶徳民先生、関西大学年史編纂室伊藤信明氏、関西大学博物館山口卓也氏、山下大輔氏、施燕氏には多くのご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

註

（1）末永雅雄編 1935『本山考古室要録』岡書院

（2）関西大学博物館 2010『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』

（3）来村多加史 1998「石斧・石鉞」『博物館資料図録』関西大学博物館

（4）岡村秀典 2008『中国文明　農業と礼制の考古学』京都大学学術出版会
吉田泰幸 2011「ベトナムにおける先史文化の考古学研究とその資源化に関する研究」『金沢大学文化資源学研究 創刊号』金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター・金沢大学国際文化資源学研究センター

（5）浙江省文物考古研究所 2005『反山　良渚遺跡群考古報告之二』北京　文物出版社
林華東　著　金普森・陳剰勇　主編 2005『浙江通史第1巻　史前巻』浙江人民出版社

（6）関西大学文学部教授中谷伸生先生、陶徳民先生のご教示による。

（7）狩野直禎 2012「狩野君山とその交友」『書論』第38号
関西大学大正癸丑蘭亭会百周年記念行事実行委員会・関西大学東アジア文化研究センター 2013『大正癸丑蘭亭会百周年記念―近代日本における翰墨の盛典―』
関西大学「山本竟山の書と学問」展示会実行委員会・関西大学博物館 2018『山本竟山の書と学問―湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク―』

（8）須羽源一 1973「大正癸丑の京都蘭亭会について」『書論』第3号　書論研究会

（9）長尾正和（復斎）1975「寿蘇会と赤壁会（上）」『墨美』第252号

（10）前掲　関西大学「山本竟山の書と学問」展示会実行委員会・関西大学博物館 2018

（11）杉村邦彦 1994「楊守敬と日下部鳴鶴―近代中日書法交流史の発端―」『書学書道史研究』4号　書学書道史学会

（12）杉村邦彦 1990「楊守敬の来日と日本人書家との交流」『書論』第26号　書論研究会

（13）梅渓昇 1992「羅振玉と日本との関係序説―羅継祖輯述『永豊郷人行年録』を読む―」『鷹陵史学』18　仏教大学
杉村邦彦 2001「羅振玉における“文字之福”と“文字之厄”―京都客寓時代の学問・生活・交友・書法を中心として―」『書論』第32号

（14）長尾正和 1974「京都の壽蘇會」『書論』第5号　書論研究会

（15）前掲　杉村 2001

（16）外山軍治 1965「本会顧問　岩井武俊氏を悼む」『史林』第48巻3号　史学研究会

博物館学芸アシスタント
文学研究科博士課程後期課程在学

天長８年の賀茂祭―「四門人馬」をめぐって

笹　田　遥　子

京都で毎年５月15日に開催される葵祭は、７月の祇園祭・11月の時代祭とともに「京の三大祭」の１つに数えられている。祭に参列する人々が葵を身につけることからその名で呼ばれるようになったが、本来は賀茂祭といい、平安時代に始まった祭である。

賀茂祭は弘仁10年（819）の勅により国家祭祀の１つとなって以降、毎年４月中酉日（中旬ごろ）に行う恒例の祭祀とされた。賀茂神社の斎王である賀茂斎院、天皇の使である内蔵使、近衛使、馬寮使ら総勢400名を超える一行は、まず賀茂御祖神社（現下鴨神社）に参って社頭で神事を行い、次いで賀茂別雷神社（現上賀茂神社）でも同様の儀式を行った［『儀式』賀茂祭儀］。

図１　賀茂祭の近衛使

筆者は以前、９世紀の賀茂祭について、六国史や『西宮記』などの儀式書を用いて検討したことがある[1)]。そこで『日本後紀』散逸などの理由により従来不透明であった９世紀の賀茂祭について、『西宮記』が数多くの勘例を引いていることが明らかとなった。小稿ではその中から天長８年（831）の賀茂祭を取り上げたい。

この年の賀茂祭は穢（けがれ）が発生するアクシデントに見舞われた。穢とは、人の死や出産、食肉などを不浄とする観念で、これに接触した人は清浄の身に戻るまで朝廷の行事や神事に携われないとされた（『日本史辞典』）。以下に『西宮記』を引用する。

> 天長八年四月十八日乙酉。鴨祭。左右馬寮穢有り、仍て親王公卿等に仰せて并びに四門の人馬之を用いる云々、［『西宮記』巻３裏書］

天長８年４月18日の鴨祭（賀茂祭）は左右馬寮に穢が発生したため、親王・公卿らに命じて、穢のあった左右馬寮の人馬の代わりに、「四門の人馬」を用いた。馬は賀茂祭において神社に向かう行列の騎馬だけでなく、下・上社で行う走馬にも用いられたため、欠かすことのできない存在であった。

祭祀にはその等級に応じて斎戒期間が設けられており［『神祇令』12条］、参加する者は穢を避けて行動を慎み、心身を清める必要があったが、穢に触れてしまったり、祭祀を行う場で穢が発生する場合もあった。賀茂祭は準備や中酉日以外の祭祀も含めるとのべ１週間程度の期間を必要としたため、穢に遭う可能性は高かった。実際、賀茂祭停止の原因は穢が多数を占めている[2)]。

一方で、穢の程度によっては祭事を遂行することが『延喜式』巻３臨時祭式にみえている。「凡そ宮城内の一司に穢有らば、祭事を停廃すべからず」とあり、宮城内の１官司で穢があっても、祭事を停廃してはならないとされていた。天長８年の賀茂祭の対応はこの規定に則したものと思われる。左右馬寮で発生した穢の詳細は不明だが、「四門の人馬」で代用して祭を行うことができる程度であったのだろう。それでは、この「四門の人馬」とは一体何であろうか。穢によって場所を代える場合は具体的な名称を示すので[3)]、天長８年のような例は珍しい。

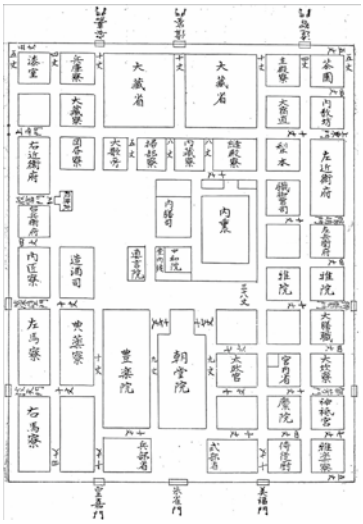

図２　大内裏図

そこで「四門」の意味を明らかにするために用例を探してみると、大晦日に行われる年中行事である追儺（ついな）の例が散見される［『延喜式』巻13大舎人寮式など］。式によれば当日追儺舎人（ついなのとねり）を「四門」に分配するとあり、

その門は宜陽門・承明門・陰明門・玄輝門で、内裏の東西南北にある門である。続いて「宮城四門」より疫鬼を追い出すが、これは陽明門・朱雀門・殷富門・達智門とあって、こちらも大内裏の東西南北に位置する（図２）。また貞観５年（863）の御霊会では、都鄙の人々を招き入れるため宣旨により神泉苑の「四門」を開門したことがみえる［『日本三代実録』貞観５年５月20日条］。この「四門」は、文意と追儺の例から東西南北の門と考えるのが妥当であろう。以上から、「四門」とは東西南北の門を指すように思われるが、そう仮定すると以下の問題が生じる。

注意を引くのは『延喜式』巻42左右京職式にみえる、諸門の厩亭（うまやてい）に関する規定である。それによれば、厩亭は左京に三宇（陽明門、待賢門、美福門）および右京に二宇（朱雀門、殷富門）あり、門衛・火長らが警護することになっていた。厩亭は史料に乏しいが、厩は牛馬の舎を、亭は人々が停集する場所を指すので、牛馬を管理する施設であると推定される[4]。またその規模は７間であったという。諸史料にはその姿がみえないが[5]、「年中行事絵巻」に梅宮社の鳥居前に建てられた５間の馬舎がみえており、参考になろう（図３）。

式によれば、厩亭は大内裏の北辺に位置する安嘉門・偉鑒門・達智門には付属しておらず、「四門」を東西南北の門とみなすには問題がある。したがってこの「四門」とは方角ではなく、単に特定の４つの門のことを指していると考えられる。さらに諸門の持つ特徴[6]から、この４つの門には左京の陽明門・待賢門・美福門が含まれる可能性が高いことが指摘できる。陽明門は公卿・殿上人の通用口で牛車から降りて徒歩で入る門、待賢門は主に官人が出入りする通用口で祭や儀式の際には公卿らも利用し、牛車から輦車に乗り換えて入った門である。美福門は壬生御門ともよばれ、天皇や上皇が出入りしたほか、その掖門は牛馬による物資運搬の通用口としても用いられた。以上のように、厩亭のあった門のうち特に左京三宇の諸門については、公卿や官人が頻繁に出入りに用いた門であることが確かめられる。

図３　梅宮祭の御馬立舎

すなわち『西宮記』記載の「四門」とは、牛馬を管理する施設である厩亭があった陽明門・待賢門・美福門の３門を含んだ門であり、「人馬」とはその厩亭に停められていた親王・公卿の馬と、その馬副らを指すと考えられる。残り１つの門については、上記の３門から遠い殷富門を選ぶとは考えにくいので、宮城の南面中央に位置する朱雀門だと仮定したい。

平安時代、賀茂祭の祭祀の等級は中祀とされ、数ある恒例祭祀のなかでも重要な位置を占めていた。ゆえに執行すること自体も重視されていたと考えられ、『延喜式』にあるように、穢の程度によっては別のもので代用するなどの対応をとって祭が行われた。天長８年はその一例で、穢のあった左右馬寮の代わりに、臨時の措置として親王・公卿らに命じて「四門」――厩亭のあった左京三宇の門と朱雀門の人馬を、恐らく賀茂社へ向かう行列の騎馬か、走馬のための馬に充てたと考えられる。

［注］

1）拙稿「九世紀の賀茂祭―『西宮記』・『日本三代実録』からみたその実態―」（『史泉』126号、2017）

2）拙稿、前掲。弘仁10年から仁和３年の間で賀茂祭の実施が確認できる37例のうち、停止は11例で、そのうち８例が死・火穢であった。

3）貞観３年（863）は、内蔵寮で人死の穢があったため、祭使は縫殿寮より進発して社に向かった（４月辛酉条）。元慶２年（878）は、死穢に染まった左近衛官人が陣座に入ったため、祭使らは天皇と対面せず、内蔵寮より社へ向かった（４月乙酉条）。出典はいずれも『日本三代実録』。

4）「左右京職式 16条」（虎尾俊哉編『訳注延喜式・下』、集英社、2018）では、警備にあたっていた門衛・火長が用いた牛馬の小屋である可能性を示す。

5）裏松光世『大内裏図考証』は、厩亭を各門にあった仗舎（衛門府の門部が守衛した詰所）に充てている。

6）西本昌弘「建部門参向者交名をめぐる億説」（『日本古代の王宮と儀礼』、塙書房、2008）

［出典］

図１　「賀茂祭の行列」（吉田光邦、小松茂美『日本絵巻大成８ 年中行事絵巻』、中央公論新社、1987）

図２　「大内裏図」（裏松光世『大内裏図考証』、明治図書出版、1955）

図３　「梅宮祭」（図１に同じ）

博物館学芸アシスタント
文学研究科博士課程後期課程在学

難波における行基の土木事業
—特に比賣嶋（ひめしま）堀川について—

家　村　光　博

はじめに

行基はその数四十九といわれる寺院を畿内に建立し、多くの社会事業施設を造った奈良時代の高僧である。社会活動を始めたころは、最初の本格的律令制である大宝律令が施行され、平城京が都となり、国家仏教が国の精神的支柱とされた時期である。行基は都を往還する運脚夫や役夫の窮状に支援の手を差し伸べ、民衆への布教活動を行った。当初、朝廷は国家仏教に反する行為として名指しで非難したが、知識と呼ばれる民衆の力を結集して、橋・池・堀川などを造る行基の活動を次第に認め、最後は大僧正の位を授けた。そうした歩みのなかで、難波における行基の土木事業について、特に比賣嶋堀川について考察してみたいと思う。

１．行基と難波

行基が難波に進出したのは天平二年（七三〇）頃と考えられる。建立寺院を年代別に記した『行基年譜』の「年代記」に、

行年六十三歳庚午、聖武天皇七年天平二年戊午（庚午）

善源院川堀　三月十一日起

尼院　已上二院、在摂津国西城郡津守村

とあり、天平二年三月に行基は西城郡（西成郡）津守村に善源院・同尼院を起工している。その後、天平十六年まで難波での寺院建立はみられない。一方、社会事業施設を記した「天平十三年記」には、

度橋六所

長柄

中河

堀江　並三所西城郡

堀四所

比賣嶋堀川　長六百丈　廣八十丈　深六丈五尺　西城郡津守村

白鷺嶋堀川　長百丈　廣六十丈　深九尺　在已上西城郡津守里

とあり、難波に長柄橋・中河橋・堀江橋の三つの橋と、比賣嶋堀川・白鷺嶋堀川の二つの堀川を造ったことが記されている。すなわち、善源院・同尼院は難波における布教の拠点であると共に、これら土木工事に携わる労働者の傷病手当や宿泊施設として建立されたと思われる。

当時の難波は後期難波宮造営の佳境にあたる。神亀三年（七二六）十月に従三位藤原宇合が知造難波宮事に任じられて難波宮の造営を開始し、天平四年三月に何らかの成果があったのか、藤原宇合は物を賜っている。そして天平六年頃には、難波宮はほとんど完成したと考えられ、同年三月に聖武天皇は難波宮に行幸し、同年九月に難波宮の宅地を官人に班給した。一方、その間の天平三年八月に条件付きではあるが、行基に随う男六十一歳以上の優婆塞、女五十五歳以上の優婆夷に対して得度が許されている。この朝廷の特別な計らいは、行基の難波での土木事業が如何に大規模で、国家に貢献したかを窺わせる。難波の土木事業が既に終わっていたと思われる天平十六年、行基は難波（西城郡津守村、同郡御津村）に新たに五院を建立し、翌年正月に大僧正の位を授かった。行基は畿内に多くの寺院と社会事業施設を造ったが、行基の活動の最大の拠点はその規模から難波であったことは間違いない。

２．行基の土木事業

行基の土木事業は交通施設の橋、灌漑施設の池、そして治水の堀川などである。行基が最初に橋を架けたのは、神亀二年（七二五）の淀川上流の山崎橋である。山崎橋は平城京から山陽道に至る古代の官道沿いに位置し、都を往還する貢調運脚夫や役夫のために架けられた橋と考えられる。そのことは、少し時代は下るが、『日本紀略』延暦二十年（八〇一）五月甲戌条に、「勅、諸国庸入貢、而或川無レ橋、或津乏レ舟、民憂不レ少、令下二路次諸国一、貢調之時、津渡之處、設中舟檝浮橋上、永為二恒例一」とあり、橋などの渡河施設の不備が貢調の障害になっていると指摘していることからもいえる。架橋は白鳳時代に宇治橋を架けた道登（『続日本紀』の道

絵図「元興寺極楽坊図絵縁起」（元興寺蔵）
元興寺の僧智光が、難波の橋を架けていた行基のもとに謝罪に行く場面

昭卒伝では道昭が架橋と記す）や、天平十一年（七三九）に河内大橋の再架橋に取り組んだとされる万福法師・花影禅師の事例があり、長い橋は僧侶と民衆による知識架橋に頼っていた。「宇治橋断碑」（『寧樂遺文』下巻）をみると、「名曰二道登一　出レ自二山尻　恵滿之家一　大化二年　丙午之歳　構二立此橋一　濟二度人畜一　卽因二微善一　爰發二大願一　結二因此橋一　成二果彼岸一　法界衆生　普同二此願一　夢裏空中　導二其苦縁一」とあり、架橋は人々を此岸から彼岸へ渡す仏教的な行為であったことが知りえる。しかし、奈良時代以前においては史料による限り、橋を架けた事例は少ない。そうした時代に行基は六つの橋を造営している。いずれも淀川水系で、その内の三つは難波であったことが注目される。『日本霊異記』中巻第七に、「時行基菩薩、有二難波一令三渡レ椅堀レ江造二船津一」とあり、平安時代初期にまとめられた説話ではあるが、行基が難波に橋を架けたことは確かであろう。中河橋は特定できないが、堀江橋は大川に架かる現天神橋、長柄橋は長柄と呼ばれる地区がある天満砂堆の中津川（現淀川）に比定されている。これらの橋は難波から北摂に向かうルートにあたる。天平十六年二月に、聖武天皇は難波宮より三嶋路を使って紫香楽宮に行幸した。

『続日本紀』天平十六年二月戊午条

戊午、取二三嶋路一、行二幸紫香楽宮一。太上天皇及左大臣橘宿禰諸兄、留在二難波宮一焉。

この記事は「三嶋路」の初見で、聖武天皇は行基が造った堀江橋と長柄橋を渡って三嶋路に至ったと想定される。難波の架橋は長期にわたる土木工事であったかもしれないが、先に山崎橋を造営しているので、架橋を進める上での問題はなかったと思われる。

それでは、掘削技術を必要とする池はどうか。行基は十五ヶ所に池を造っているが、それ以前に僧侶による造池は史料にみられない。国家による池の開発の事例はいくつかあり、古くは崇神紀に依網池・苅坂池・反折池の造池がみられる。依網池は江戸時代の大和川の付け替えによって姿は消えたが、文明年間（一四六九～一四八六）に描かれたと伝えられる「依羅池古図」などから、大依羅神社（大阪市住吉区庭井）の南面にあったとされる。そこは中位段丘と氾濫原の境界部に位置し、低地部に堤を築いた底が浅い池であったと推定されている。行基が池の開発に乗り出したのは、養老七年（七二三）の「三世一身法」の施行による。この法令は地方豪族や有力農民の自発的な開墾を奨励するもので、行基は彼らとともに池溝などの農業関係施設を造りつつ、民衆教化にあたったのである。行基は二つの地域で造池を行っている。一つは本貫地の和泉周辺である。もう一つは伊丹台地である。伊丹台地の崐陽上池（現在の昆陽池）などは、陥没地帯に池を築き、北方の水を溜めて南方に流すことにより、荒れ地を広々とした水田に変えた。地面を掘削したというよりも、地形を上手に利用して谷間を囲み貯水する方式である。奈良時代までの造池は、山沿いの浅い谷に堤を築き、谷に注ぐ水を集める谷池的構造のものが多くみられ、大掛かりな掘削が必要な皿池は平安時代以降に下ることが確かめられている。池の規模にもよるが、段丘に囲まれた谷下に堤を築く土木工事は比較的容易であったと考える。

しかし、難波での堀川の土木工事は大規模な地面の掘削であり、鍬などのすぐれた鉄の用具が大量に必要で、池溝開発とは違い行基や地元の豪族が調達できる量ではなかったと推測する。これを調達するには国家レベルの協力が必要である。因みに井上光貞氏が、天平神護二年の「東大寺為南野開溝功食注文」にみえる溝を開いた労働量から、「天平十三年記」にみえる崐陽上溝は、掘削に延べ八五七人を要したと試算されている。それを基に比賣嶋堀川の労働量を調べてみる。比賣嶋堀川の大きさは、『行基年譜』の「天平十三年記」に、

長さ六百丈（一七七六メートル）

広さ八十丈（二三七メートル）
深さ六丈五尺（六尺五寸の誤記と思われ、一.九メートル）

※天平尺で換算、一尺＝二九.六センチと記されている。容積比で単純計算すると延べ九万二千人となる。参考に『続日本紀』に記された国家レベルの土木工事をみてみると、天平宝字六年（七六二）四月に狭山池の貯水量を二倍に増やしたとされる修復工事は、単功(延べ)八万三千人。宝亀元年（七七〇）七月の志紀・渋川・茨田等の堤の修復工事は、単功三万余人である。比賣嶋堀川の土木工事がいかに大規模であったかがわかる。

3．仁徳期の堀江と比賣嶋堀川

行基以前に掘削された大規模な堀川といえば仁徳期の堀江である。その造営の経緯をたどると、仁徳天皇が難波高津宮から眺望した大阪平野低地の景観について述べたとされる記事がある。

『日本書紀』仁徳天皇十一年夏四月戊寅朔甲午条

詔㆓群臣㆒曰、今朕視㆓是國㆒者、郊澤廣遠、而田圃少乏。且河水横逝、以流末不㆑駛。聊逢㆓霖雨㆒、海潮逆上、而巷里乗㆑船、道路亦泥。故群臣共視之、決㆓横源㆒而通㆑海、塞㆓逆流㆒以全㆓田宅㆒。

内容は、原野と沼沢地が広がっているが農地が少ない。また河水が横に流れて澱み、大雨ともなれば海の水が逆流する。「横源」を開削して河水を海に通して逆流を塞ぎ、民を安心させたいとする。この記事から、草香江（河内湖）に流れ込んでいた淀川・大和川・寝屋川の河水は天満砂堆の東側に沿って流れ、天満砂堆の北端を西に進んで海に流入するという流路をとっていた想定される。同時に上町台地から北に延びる天満砂堆には東西に流れる川はなかったことを教えてくれる。そして、同年十月に南の大和川などの水を西海に放流するために堀江を開削した。

『日本書紀』仁徳天皇十一年冬十月条

掘㆓宮北之郊原㆒、引㆓南水㆒以入㆓西海㆒。因以號㆓其水㆒曰㆓堀江㆒。・・・・・

この堀江は現代の大川（旧淀川本流）とするのが定説で、天満砂堆の南端にあたる。堀江の開削の主な目的は草香江の水位を下げ、沿岸の水害を防ぐことにあったが、堀江によって難波津は淀川・大和川とむすばれ、難波津と後背地との連絡がはなはだ便利になった。その後、難波の地が開発されていったことが考古学及び文献史料から読み取れる。難波京の発掘調査では、法円坂倉庫群と呼ばれる五世紀中葉から後半とされる大型倉庫が十六棟みつかっている。史料をみると、安閑天皇元年十月条に「以㆓難波屯倉與㆒毎㆑郡鑊丁㆒、給㆓貺宅媛㆒」とあり、六世紀前半には難波屯倉が存在していたことが知りえる。

比賣嶋堀川も仁徳期の堀江と同じ様な目的で造られたと思われる。この比賣嶋について、薗田香融氏は姫島と大隅島が並称されている『日本書紀』安閑紀と『続日本紀』霊亀二年二月条の記事を踏まえ、大隅島は今の東淀川区大桐・大隅付近に比定されるのだから、姫島はそれに隣接する淀川区一帯に比定するのが最も妥当ではあるまいかとする。以上の観点から、比賣嶋堀川の位置は図１の赤色で示す天満砂堆の幅が少し狭まる中程を、大川（堀江）と並行して流れていた中津川の砂堆部分と考える。中津川は明治三十年から同四十三年にわたった淀川改修工事で淀川本流となり、旧流路は消えたが、図１の国土地理院の治水地形図で中津川の流路が確認できる。行基は養老七年（七二三）の「三世一身法」が引き金となり、乾いた洪積台地を水田に変えるために池溝開発を行った。同じように、水害が絶えなかった淀川の水を西海に放流して、洪水対策とともに難波周辺の低湿地帯を水田に変えるのが比賣嶋堀川の開削であった。天満砂堆を横切る中津川の大きさを調べてみると、淀川左岸沿いの天満砂堆の東西（現在の毛馬閘門から豊崎変電所）の長さは、国土地理院の土地条件図（土地条件調査報告書（大阪地区）［付録］の二万五千分一地形図）で図上略測約一七〇〇メートルを測り、比賣嶋堀川とほぼ同じである。中津川の川幅は図１から淀川の三分の一程と推測できる。その辺りの淀川に架かるJR東海道本線の上淀川渠梁は全長七二九.三メートルで、その三分の一は二四三メートルとなる。広さも比賣嶋堀川に近い。

行基は大規模な堀川を開削して淀川の水害対策を強化した。淀川の西海への放水は、それま

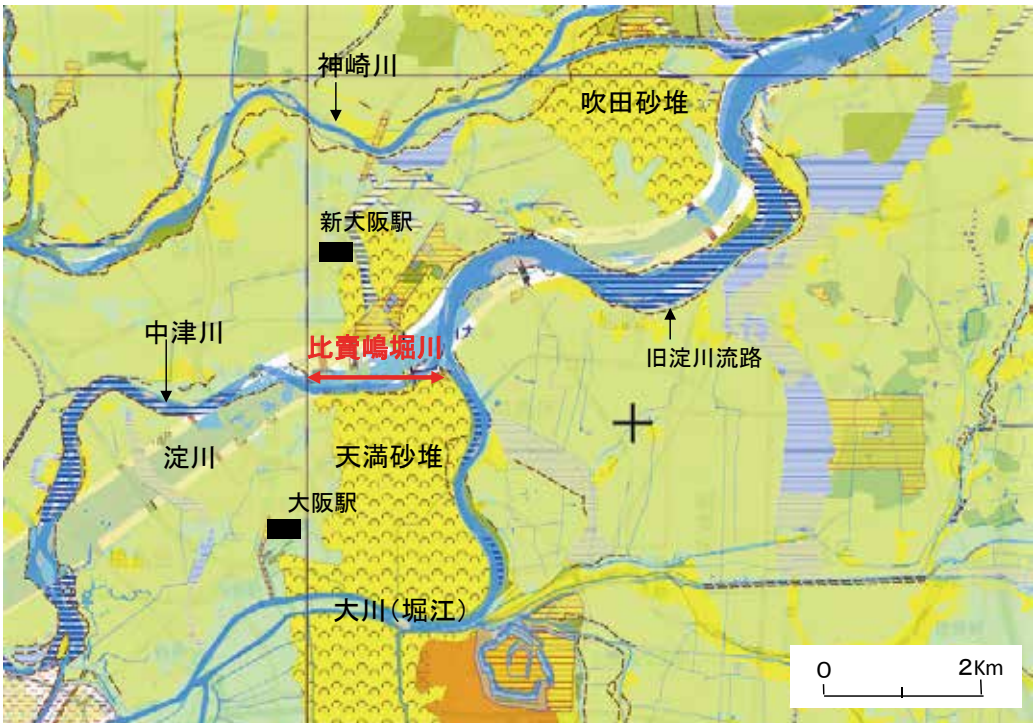

図１　明治期の低湿地を重ね合わせた治水地形図（国土地理院、電子国土 Web）

では大川（堀江）だけであったが、中津川を拓くことにより、放水路が二つとなり、淀川と草香江の水位をさらに低下させ、天満砂堆の西側は土砂が堆積していった。それが後に難波周辺の低地を水田に変え、水運にも寄与したというのが実態であったと思われる。難波周辺に墾田が増加したことは、平安時代以降の史料にみえる荘園から読み取れる。草香江の西部には平安時代に法隆寺領など、そして十二世紀には広大な摂関家領の榎並荘が成立している。現代の旭区・都島区のほぼ全域と、城東区北部、鶴見区の一部を含んでいたと考えられている。天満砂堆の西側は、鎌倉時代に天王寺領鷺島荘、浄金剛院領福島荘、七条院領中津荘がみえる。現代の大阪駅の北方一帯、元の中津村光立寺・下三番村から曽根崎にかけての地区に、明治期の地籍図によって条里地割の分布がみられるとのことで、平安時代には田地が一部開けていたことがわかる。

行基は仁徳期の堀江と同じ目的で天満砂堆中程に比賣嶋堀川を開削した。図１をみると、天満砂堆を流れる大川（堀江）と中津川（比賣嶋堀川）は兄弟のようにみえる。中津川が自然の営為によってできたとは史料及び歴史地理学の面から今のところ説明がつかない。砂堆地形を横切るほぼ真直ぐな河道は自然のものというよりも人工的に開削された可能性が高いと思われる。

［引用・参考文献］

薗田香融『日本古代仏教の伝来と受容』（塙書房、二〇一六年）

川内眷三『大阪平野の溜池環境―変貌の歴史と復原―』（和泉書院、二〇〇九年）

栄原永遠男『天平の時代』日本の歴史④（集英社、一九九一年）

吉川真司『聖武天皇と仏都平城京』（講談社、二〇一一年）

亀田隆之『日本古代治水史の研究』（吉川弘文館、二〇〇〇年）

井上光貞「行基年譜、特に天平十三年記の研究」（『律令国家と貴族社会』、吉川弘文館、一九六九年）

服部昌之「古代における景観構成とその変化」（『新修大阪市史』第一巻、大阪市、一九八八年）

直木孝次郎「国家の形成と難波」（直木孝次郎編『古代を考える難波』、吉川弘文館、一九九二年）

南秀雄「難波宮下層遺跡をめぐる諸問題」（『難波宮と都城制』、吉川弘文館、二〇一四年）

薗田香融「古代の吹田」（『吹田市史』第一巻、吹田市、一九九〇年）

河音能平「中世前期の荘園と公領」（『新修大阪市史』第二巻、大阪市、一九八八年）

服部昌之「難波の条里と交通路」（『新修大阪市史』第一巻、大阪市、一九八八年）

絵図「元興寺極楽坊図絵縁起」（元興寺蔵）は、『特別展行基と狭山池』（大阪狭山市立郷土資料館、一九九三年）より転載

文学研究科博士課程後期課程在学

関西大学博物館2018年度夏季企画展
神戸市立博物館選　地図皿にみる世界と日本

施　　燕

関西大学博物館では、神戸市立博物館と共催し、2018年７月２日から８月５日まで夏季企画展「神戸市立博物館選　地図皿にみる世界と日本」を開催した。

「地図皿」というのは陶磁器に地図を描いたものである。平賀源内（1728～79）が指導したと伝えられる源内焼がその始まりで、天保年間（1830～44）には、有田（佐賀県有田町）を中心に生産されるようになる。神戸市立博物館の古地図コレクションの多くを収集した南波松太郎氏によれば、「むかし武士が元服する時に、国をとるすなわち国持ち大名のようになる、すなわち出世するという縁起から、この日本図の皿の上に、ピンとはね上がった景気のいい鯛を載せて祝ったとされる。この風習が一般庶民に伝播大流行し、伊万里では天保頃から盛んに大小多量の地図皿を製造したものらしい」[1)]という。

地図皿に描かれた地図には現在の私たちの常識と合致するところもあれば、一目国、長人国、小人国、女人国など好奇心をくすぐる国々の名前もみられる。

今回の展覧会は神戸市立博物館（南波コレクション）所蔵の地図皿を中心に、当時の人が目にしていた地図や地誌書も参考資料として出品し、地図皿そのものだけではなく、そこに描かれた地図から、江戸時代の世界観を合わせて紹介した。

展示風景

江戸時代の地図出版と地図皿

地図を陶磁器に描くという発想はどこから来たかははっきりしないが、木版技術の発展により多種多様な地図が大量に刊行されたという時代背景が無視できない。江戸時代では手書きのものしかなかったそれまでとは異なる地図の文化が隆盛し、18世紀半ばまでに世界図や日本図を始め、都市図、道中図、国図など様々な地図が世に広がった。

その状況を反映し、源内焼の地図皿が登場した。源内焼は、宝暦年間（1751～64）に志度（香川県さぬき市）で製作された軟質陶器で、平賀源内の指導によるものだというのがその名称の由来である。源内焼の地図皿では、世界図や日本図のほか、緯度やコンパスローズなどが添えられ、おそらく平賀源内が当時入手できた最新の地図を手本にしたのであろう。源内焼に世界図や日本図を図柄の一つとして採り入れたのは異国趣味を好む平賀源内自身の進取的な性格の反映でもあるが、地図というものが当時の人々にとって身近なものになってきたというのは一つ大きな要因であるに違いない。

伊万里焼日本図皿と行基図

19世紀半ば、伊万里焼にも地図を採り入れるようになった。世界図、日本図、九州図がみられるが、なかでも日本図が圧倒的に多い。それらの日本図は基本的には同じく行基図と呼ばれる簡略的な日本図である。中世から近世の初めにかけて、人々は行基図のような簡略的な日本図によって日本の形を認識していた。

一方、天保年間には、当時のベストセラーといわれる「改正日本輿地路程全図」（1779刊）のような、より精緻な地図が存在していたにもかかわらず、伊万里焼地図皿にはあえて簡略的な行基図を採り入れた。それは、精緻な地図を皿に再現する過程を考えると、簡略的な行基図の方が製作の手間を省かせる上、皿の形状にも合わせやすいからかもしれない。

しかし、国郡、石高、城下や名所など細々と盛り込んだ情報を地図に求めた当時の人々にとっては、伊万里焼に描かれた「地図」はいかにも実用性に乏しいだろう。地形の正確さや時勢を反映した情報を重視するより、一種のデザインとして描かれているのかもしれない。その点

では、最新の地図を忠実に描いた源内焼地図皿とは性格が違うといえよう。

一方、比較的早い時期に刊行された行基図（『拾芥抄』［1656刊］所収、関西大学図書館蔵）には、「蝦夷」や「琉球」は描かれないのに対し、伊万里焼に描かれる日本図には基本的に日本を中心に、「蝦夷」「松前」「朝鮮」「琉球国」とともに、「女護国」、「小人国」を配していることから、地図をデザインとして採り入れながらも、当時の人々が知りえた一般的な地理認識を反映させていることが読みとれる。その点からみると、「女護国」や「小人国」はきわめて興味深い。果して、それらの国々は当時の人々にとってどんな存在だったのだろう。

地図皿にみる空想の国

18世紀初期に出版された地図をみれば、例えば、「万国総界図」（1708刊）、「南瞻部洲万国掌菓之図」（1710刊）、「大日本国大絵図」（1712刊）にはいずれも空想上の国を確認できる。なかでは小人国、長人国、女島など様々にある。また、当時では一般知識として流布した『増補華夷通商考』（1708刊、関西大学図書館蔵）、『唐土訓蒙図彙』（1719刊、関西大学図書館蔵）などの地誌書にも同じ世界観を示している。さらに、当時の百科事典『和漢三才図会』（1715跋、関西大学図書館蔵）には空想の国について位置情報や特徴、民俗などを詳しく紹介している。同書によると、小人国は日本の北方にあり、小人は身長が小さいため海鶴に呑まれるのを恐れて群れて行動するという。

一方、江戸後期になると、例えば「改正日本輿地路程全図」では、空想の国はすべて姿を消している。ところが、その後に出版された「喝蘭新訳地球全図」（1796刊、関西大学図書館蔵）では小人国や女人国などは見出せなくなったが、南アメリカに未だ長人国を残している。西洋の知識を取り入れながらも、従来の世界観を保留しつつあるということであろう。すなわち、当時の日本において、西洋の地理知識の流入につれて、従来の世界観が取り替えられたのでなく、新旧二つの世界観が併存、混在していた。だからこそ、江戸後期になってなお空想の国を主題にした異国絵本や文芸作品が多く出版されている。

『和漢三才図会』より

例えば、『小人じま七々里富貴』（1794刊、関西大学図書館蔵）では海に漂着した大仏の頭に小人たちが大漁を祈願したところ、一匹のマグロが浜に入り込み、それを獲って大儲けをしたという話が描かれている。その世界では、寛永通宝の銅銭は小人たちの車になる。未知の世界に対して、いかに想像力を働かせたかを物語っている。位置情報や民俗の紹介だけでは、もはや異国への好奇心を満たしきれないからだろうか。

『小人じま七々里富貴』より

当時の社会情勢から考えると、次第に開放的になりつつある江戸後期において、外国船の出入りや海外情報、地理知識の流入は、庶民にとっても外の世界へ関心をもたざるをえない状況を生じさせた。当時の人々にとって、小人国（島）、女人（護）国のような空想の国はやむなき好奇心の代替として存在しているのかもしれない。

天保年間に大流行した伊万里焼の地図皿に空想の国が登場し続けているのもその流れを汲んでいるのであろう。言いかえれば、地図皿にみられる空想の国はそこで未知の世界を象徴するという役割を果たしていたのではないだろうか。

展示会を終えて

地理上の位置や地形などからみれば、現実と空想が混在していた当時の地図は決して正しいとはいえない。しかし、地理情報の正確さより、そこに反映された当時の社会情勢や人々の関心の所在こそを、私たちは読みとるべきであろう。多文化の現代社会を生きるなかで、他者を理解する姿勢に通ずるところが示唆的だといえよう。

［注］

1）南波松太郎「地図皿」、南波松太郎先生文集出版実行委員会編集『船・地図・日和山』、法政大学出版局、1984、538頁

※本文中所蔵先が明記していない資料はすべて神戸市立博物館所蔵。

関西大学博物館学芸員

◘ 博物館だより

◇2017年度関西大学博物館　開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	26	25	27	26	18	23	25	25	20	19	16	16	266
入館者数	1,650	1,569	1,376	857	3,498	503	483	959	405	339	377	419	12,435

◇４月１日から５月20日まで、2018年度春季企画展「山本竟山の書と学問－湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク－」を本学の東西学術研究所と共催し、3,517名の方にご来場いただきました。

◇2018年度ミュージアム講座「大阪の近現代建築とその楽しみ方」を関西大学千里山キャンパスと梅田キャンパスにて開講し、184名の方から聴講の申込みをいただきました。講演後には村野建築ガイドツアーも実施し、たくさんの方にご参加いただきました。

第１回　４月28日「関西大学の村野建築」 関西大学環境都市工学部准教授　橋寺知子
第２回　５月12日「大阪府内の近代建築と文化財」 大阪府教育庁文化財保護課　神谷悠実
第３回　５月19日「近現代建築の楽しみ方－イケフェス大阪－」 近畿大学建築学部准教授・建築家　髙岡伸一

◇今年度も資料の取扱いを実践的に学ぶ「博物館実習実践研修会」を開催しました。藤枝宏治氏による表装研修（６月14日）、河内國平氏・河内晋平氏による日本刀研修（６月23日）を実施し、２回の講座で合わせて51名の方が参加されました。

◇夏季企画展として「神戸市立博物館選－地図皿にみる世界と日本－」を７月２日から８月５日まで開催しました。本企画展は、神戸市立博物館と共催して、同館のコレクションから地図皿の優品を展示したほか、南蛮屏風（高精細複製）や地誌書など関連資料も合わせて紹介し、期間中は4,107名の方にご来場いただきました。また、７月14日には神戸市立博物館の学芸課長 小野田一幸氏と学芸員 中山創太氏を講師にお迎えし、講演会も開催しました。

◇今年度も夏の恒例行事「キッズミュージアム」を７月25日（書道教室）と８月２日・３日に実施しました。８月２日・３日には今年も学内・学外からの協力を得て、子供たちに様々なプログラムを体験してもらいました。今年の夏は猛暑となりましたが、小学生を中心に３日間で2,144名の皆さんが参加され、夏休みの思い出の一つとして存分に楽しんでいただきました。

◇本年度上半期、伊吹文明氏よりＳＰレコードとＬＰレコード合計462枚及び音楽関連書籍175冊、横山悦子氏、横山隆道氏、福島久仁子氏からは、故横山滋氏のガラスコレクション997件とガラス関連書籍185冊を、さらに吉田秀樹氏からは、簡文館の大阪府有形文化財指定を記念する銘板をご寄贈いただきました。

・・・編集後記・・・

表紙は、本館所蔵の蓄音機です。1928（昭和３）年、英グラモフォン社製HMV193です。製品番号の「HMV」は、His Master's Voiceの略で、ご主人の声を聞く犬のマークで有名なものです。本機は、電気を使わずゼンマイ仕掛けでターンテーブルを回し、鉄針で拾った音をリ・エントラントの亜鉛製のホーンで増幅させて開口部から出す構造になっています。当館では展示室で定期的にこの蓄音機を使ったＳＰレコードの演奏会を開催しています。

昨年度から関西大学博物館において高度専門職業人としての学芸員を養成することを目的として、学芸アシスタント制度が創設されました。2018年度は、昨年度に引き続き文学研究科博士課程後期課程３年の渡邊貴亮さんと、新たに文学研究科博士課程後期課程２年の笹田遥子さんが学芸アシスタントとして博物館の学芸業務に従事しています。

関西大学博物館彙報　No. 77　2018年９月30日 発行
関西大学博物館　　編集